

第13回白壁賞は高木靖寛氏らが、第32回村上記念「胃と腸」賞は滝沢耕平氏らが受賞

2007年9月19日(水)、一ツ橋ホールで行われた早期胃癌研究会の席上、第13回白壁賞と第32回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第13回白壁賞は高木靖寛・他「食道m3・sm癌の最新の診断—X線診断の立場から」(胃と腸41:1359-1373,2006)に、第32回村上記念「胃と腸」賞は滝沢耕平・他「早期胃癌に対する内視鏡的切除の適応拡大—未分化型腺癌について」(胃と腸41:9-17,2006)に贈られた。

第13回白壁賞

研究会司会の井上晴洋氏(昭和大学横浜市北部病院消化器センター)から、まず第13回白壁賞受賞者代表として高木靖寛氏(福岡大学筑紫病院消化器科)が紹介された。本賞は、故白壁彦夫氏のご業績を讃えて、消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考の対象となる。今回応募論文はなかったため「胃と腸」41巻に掲載された全論文が選考対象となった。

選考小委員会を代表して田中信治氏(広島大学病院光学医療診療部)は、本賞は選考小委員会が慎重に候補論文を絞った後に全編集委員の投票により決定したもので、学術性・論文の形式・画像の質・社会への貢献度・国際性・今後の発展性・倫理性などを選考基準としていると説明し、本論文について“m3以深食道表在癌52例を対象に、非常に美しいX線画像で病変最深部を形態別に解析した論文である。食道表在癌のX線診断学の発展性を示唆する論文として評価された”と選考理由を述べた。

「胃と腸」編集委員長の芳野純治氏(藤田保健衛生大学第二教育病院内科)は“十数年間に蓄積された写真を使い検討しているが、切除標本と病理組織像を緻密に対比させていて形態診断学に非常に寄与すると評価された。提示されたX線像が非常にきれいであるということ、標本の取り扱いが見事であることが本誌にとっては大切なことと評価された”と述べ、賞状と盾を贈呈した。医学書院金原優社長からは、賞金50万円が贈呈された。

受賞者代表として、高木氏は“このような賞をいただき誠に感謝している。食道のX線診断について当科の八尾恒良前教授より仕事をいただき、右も左もわから



▲満員となった早期胃癌研究会会場(一ツ橋ホール)。



▲祝辞を述べる芳野純治氏。



▲選考経過を述べる田中信治氏。

ないまま早期胃癌研究会や「胃と腸」に掲載されているような美しい写真にあこがれX線写真を撮ってきた。食道X線については多くの先生が既に詳細に検討をされているが、今回、m3・sm1癌というカテゴリーで浸潤幅、深達度を加味して論文を書いた。今まで本研究会に加えて食道色素研究会でもたくさん症例を勉強させていただき感謝している。また、このようなテーマを与えていただき診療に従事させていただいている当科の八尾前教授、松井敏幸教授、病理部の岩下明德教授に大変深く感謝申し上げたい”と挨拶した。

第32回村上記念「胃と腸」賞

引き続き、第32回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。本賞は、故村上忠重氏のご業績を讃え、消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」41巻に掲載された全論文の中から選ばれた。

井上氏から受賞者代表の滝沢耕平氏(国立がんセンター中央病院臨床検査部、現：静岡県立静岡がんセンター内視鏡科)が紹介された後、選考小委員代表の田中氏から、白壁賞と同様の手順で慎重な選考が行われたことが報告された。田中氏は“外科的切除された534例の未分化型早期癌を用いた病理組織学的所見、免疫学的所見に基づく詳細な解析結果から、転移のない未分化型早期胃癌の条件を明らかにした論文である。未分化型早期胃癌への内視鏡治療の適応決定、切除後の根治度判定など、将来の内視鏡治療の適応拡大につながる基礎的検討



▲ 第 13 回白壁賞を受賞した高木靖寛氏。



▲ 第 32 回村上記念「胃と腸」賞を受賞した滝沢耕平氏。



▲ 芳野氏(右)から高木氏(左)に賞状が贈られた。



▲ 芳野氏(右)から滝沢氏(左)に賞状が贈られた。

論文として評価された”と選考理由を述べた。

芳野氏は“500 例を超える未分化癌症例を調べているが、免疫学的な検討もされていて大変ご苦労されたと思う。現在、内視鏡治療の適応拡大が非常に問題になっており、次の時代の治療に役に立つ仕事をされたと考えている”と述べ、賞状と盾を贈呈した。金原社長からは賞金 50 万円が贈られた。

受賞者を代表して滝沢氏は、“大変光栄な賞をいただき誠にありがとうございました。国立がんセンター中央病院でのレジデント時代に 1 年間、下田忠和先生(同臨床検査部)の下で病理を学ばせていただいていたときに今回のテーマをいただいた。内視鏡治療に携わる者として、未分化型早期胃癌に対する内視鏡治療の適応拡大

に関しては大変興味を持っていた。朝から晩まで免疫染色を何か月も続ける日々であったが、自分の研究に没頭できたのも当時自分のルーチンの仕事を代わってくれていた周囲の先生方の助けがあったからと、深く感謝している。皆様の力を借りて、今回のデータを出すことができたが、残念ながらこれですべて未分化型癌に対する内視鏡治療の問題が解決したわけではないので、これからもこれをテーマに日々努力していきたい。丁寧に指導してくださった下田先生はじめ国立がんセンター中央病院臨床検査部の皆様に深く感謝したい”と挨拶した。

最後に、両賞の受賞者に満員の会場から拍手が贈られた。10 月度早期胃癌研究会では、両賞の受賞者による受賞論文の概要の講演が行われた。